

みなさんご無沙汰です。青という字です。

現在、ゲストハウスのオーナーとカヤックのインストラクターガイドしてます。日本海ジオパークの洞窟など絶景を案内しています。



とりあえず最近の日焼けした白髪交じりの写真もいれておきました。



メッセージ

宿泊業をしているとなかなか休めません。今回は同窓会に行けなくて残念でした。結婚が遅かった(39才の時)なので次男が、まだ大学生です。来年、古希70才になりますが、まだまだ頑張らないといけません。

去年は、同期のメンバー5名が4泊5日、ゲスハウスかたゑ庵へ来てくれました。もし島根に来ることがあれば連絡ください。

青戸裕司

補足

私の活動参考資料

※これは地元の文化情報誌、『湖都松江』Vol50号、今年先月発売、に私が取材され掲載された内容です。これを読んでいただければ、青年の船の体験とそこから40年間事後活動してきたこととつながると思います。

『漁村を歓交地に』に～奇跡を起こす交流拠点・かたゑ庵

青戸裕司さん
(インタビュアー 文化情報誌『湖都松江』編集委員 福頼尚志)

国際交流経験とかたゑ庵の始まり

私の原点は今から四十年前、内閣府の青年の船に参加したことにあります。

初めての海外で十五カ国以上の仲間と出会い、異文化の中で感じた驚きと感動が、その後の生き方を決めました。帰国後は島根を訪れる外国人のホームステイを受け入れて、異文化に触れながら地域で国際交流を広げて今まで四十カ国以上の方と出会いました。

やがて結婚して子どもが生まれ、一歳と三歳だった息子たちを自然豊かな場所で育てたいと思い立ち、知人の紹介で小さな港町であるここ片江に移住しました。

十年の約束で家を借りたのでその後は松江の中心部へ戻りましたが、片江の自然の環境と人の繋がりが忘れられず、ここなら若い頃から温めてた国際交流への思いを形にできると考えたんです。地元の古民家を私が近くで住んでいたこともあり格安で提供いただきましたが宿泊施設としての改築工事などかなりの費用です。

そこで資金集めのためにクラウドファンディングを行いました。それも、オール・イン(目標額以下でも集まった全額を受け取る)ではなく、敢えてオー・オア・ナッシング(目標額に達しなければ返金する)方式で挑んだんです。

国際交流活動から、人と人の繋がりが互いの夢を応援し実現させていくのだと、私は信じていました。その結果、一週間前には目標の半分にも達していなかったのに、期限間際にあれよあれよと支援が膨らんで、最後には一三八%を達成する大成功でした。

これはひとえに、長年の人との繋がりがや、共感してくれた方々のおかげです。そうしてこの古民家が宿泊施設として改修でき、地域と世界をつなぐゲストハウス「かたゑ庵」を開店しました。これが今から六年前のことです。

地域連携で生み出す交流の形

片江は観光地ではありません。かつて大正時代から昭和三十年代にかけ、機械曳底引漁法で全国に名を馳せた片江船団があり、漁師だけで七百人もいた時代もあったようです。

しかしそれも今や十三名、民宿も高齢化で次々と廃業する状況でした。「限界集落になってほしくない、子供たちの故郷を残したい」という思いをモチベーションとして、一方ゲストハウスへの集客手法については頭を悩ませました。

そんな時に思いついたのが、私自身のホームステイの経験をヒントに、民家が夕食時に外国人を受け入れて二時間を共に過ごす企画、民宿ならぬ「民食」です。地元の年配の方々に「外国語が話せなくても大丈夫、何とかなるから、きっと楽しい思い出になります。やってみない？」と相談したところ、集まった八軒が賛同してくれました。

しかし、すぐにお客さんが来るわけでは ありません。そこで、市内の外国人知人に試してもらえないかと呼びかけたところ、ノルウェーの女性が興味を持ってくれました。「ノルウェーから十五名来日し

て、京阪神や広島を訪問する予定だけれど、青戸さんのアイデアはとても面白い。もしかしたら片江まで足を伸ばすかもしれない」というのです。

私はこの時に民食と共に「竹のワークショップ」を提案したのですが、これが大ヒットしました。ノルウェーにはそもそも竹が繁殖してないから珍しいのです。彼らが竹藪に入り、様々な竹製品を作る体験は、片江に来る最大の動機となりました。夕食体験である民食と合わせ、参加者は皆、大喜びです。

八十代の一人暮らしのおばあちゃん宅では、たった二時間食事をしながら一緒にいただけなのに、肩を組んで別れを惜しむ光景が見られました。その姿を見て、これこそ片江の強みだと確信しました。

こうした活動がやがてメディアの目に止まり、地元の新聞社やNHK、そして東京のテレビ朝日が取材に来るようになりました。テレビ朝日はクラファン成功事例をチェックしていたかたゑ庵を知ったそうで、クラファンは資金集めだけではなく社会の注目を集める役割も果たしているのだと実感しました。令和元年七月にはディレクターが一週間かたゑ庵に滞在、取材、そして十月に番組が放送されると、ホームページが数分でアクセス不能となるほど、そして一気にかたゑ庵の取り組みが広がりました。

コロナ禍を乗り越える新たな挑戦

—カヤック体験ツアー—

こうして大きな期待を胸に年を越したのですが、年明けから状況は一変。日本にもコロナ禍の波が押し寄せ、海外はおろか都道府県間の旅行すら困難となりました。あの頃は全国どこもそうだったと思いますが、この地域でも感染症への不安が広がり特に外国人をターゲットにしているこのゲストハウスは、言うまでもなく大きな影響を受け、もはや民食など考えられない状態になりました。

外国人のターゲットはもちろんその後も他府県ナンバーへの警戒などコロナ禍は続いて、ゲストハウスだけの経営はしばらくは無理だと困り果てました。その時に目を向けたのが、コロナの中、始まっていたアウトドアブームでした。

屋外ならば三密にはなりません。国立公園でありジオパークであるという土地の強みを活かす道を考えました。二十年前にここに住んでしたころ始めていたカヤック、地域の仲間と共にインストラクター資格を取得して、二人でカヤックツアーを始めることにしたんです。

さらに地域の知識と特色をだすため、ジオガイドの資格も取得しました。一般的なカヤックツアーは、インストラクターがシングルカヤックを複数連れて行くため、荒れる日本海ではリスクが高いと感じていました。そこで、三人乗りカヤックを特注してそれにゲスト二名と一緒に乗せツアーを行うことにして二艇導入しました。余裕はありませんでしたが補助金も活用し、これに賭けました。

これが現在のかたゑ庵の大きな売りの一つになりました。カヤックに乗ると、海の透明度の高さに「沖縄に行かなくてもいいね」と感動する声も聞かれます。三人乗りカヤックは安定感があり、ひっくり返る心配もほとんどなく、私と一緒にパドルングするので安心です。想像以上にスピードが出るため、広範囲を探検できます。洞窟のようなカックでしか行けない絶景も多く、みんな感動して、リピーターも少なくありません。まさにジオパークの地形を活かした観光地として広がっていきました。

地域活性化の展望と未来

かたゑ庵オープン的一年前、区長や婦人部など地域の方々を集めて「ゲストハウスを開こうと思うがどうか」と相談した時のことです。もし反対されたらとの不安もありましたがみんなが「この地域の活性化に繋がるとてもいい活動だ」と賛同してくれ、大いに盛り上りました。こうした地域のみなさんの想いが、今のかたゑ庵の存在を支えてくれているんです。ならば、それに応えなければとも思いません。

誘客も敢えてなぜプッシュ型のSNSや旅行サイトを使わないでプル型の独自のホームページを重視するのか。

それは私が頻繁に更新する記事には、こだわりのテーマやキーワードが詰め込んであります。遅効性ではありますがそこに検索でたどり着いてくれる人たちが私の一番の来てほしい方々なのです。それは地元の人にとってもきっとウエルカムなゲストであると思うからです。

今後は検索エンジンよりも生成AIによる利用が増えれば、私のように独自のプラットフォームを持っている強みは基本的な考え方や過去の実績・評価がピックアップされそれがわかりやすく整理され、結果、誘客に生かされると私は予想しています。

さらに地図を見ながら分析をすると片江を中心に車で十五分圏内が鬼太郎ロード・由志園・美保神社の好立地、少し足を延ばせば出雲大社や足立美術館。

自転車やバイクの近場のコースとしても最適です。片江町内に目を向けても長寿寺は禅寺なので座禅体験も行ってもらったり、方結神社には神輿も鑑賞でき外国人にも好評です。

そして海ではカヤックでのジオパーク。それを地図内に見える化し、マイクロツーリズムとしてホームページに紹介し、それは連泊を促す効果も生んでいます。

人と人との交流は、深まるのと同時に広がっていくものです。例えば一昨年私のカヤックツアーを知った日本洞窟学会から「陸上の洞窟は大方計測してきたが、これからは海上洞窟の計測を始めたい。そちらで協力してもらえないか」との相談があり、学会の人がいろんな大学の探検部の学生さんたちを連れてやってきたんです。

カヤックでジオパーク内の洞窟を案内すると「これは凄い洞窟だ」と学会で発表。その中で珍しいコウモリの生息地が見つかり、今度はサヒメル(島根県立三瓶自然館)でコウモリを研究している方との連携も始まりました。

こうして次々といろいろな繋がりが生まれていくのが本当に面白いんです。このままでは限界集落になりかねなかった片江に様々な視点から新たな観光資源が生まれ、その魅力が発掘されて、海外からも人を呼び込むようになる。

そうした中から片江が注目され、特に子育て世代が定住に拘らず一時的な移住でも私がそうであったようにこの地域で自然豊かな環境を生かし楽しんでくれる人が増えていくな、素晴らしいことですよ。「全く観光地でないところでも、こんな挑戦をしている」という一つの事例として、かたゑ庵が何かのヒントになれば嬉しいです。

青戸裕司

島根県 松江市美保の関町片江396 ゲスハウス かたゑ庵
電話0852-55-8600(ゴーゴーハロー)メールinfo@kataean.com



カヤック体験ツアー動画QR



ホームページ & ブログQR



メールQR

なお、FB・X・インスタ・LINE等は敢えてやっていません。もし何かあればメールで連絡ください。

この原稿をwebからダウンロードされたい方は、こちらのQRコードからダウンロードください。